日本語の読解における学習課題とストラテジーの関係に関する調査

工藤　嘉名子
（ミネソタ州立大学秋田校）

1. 研究の背景

最近、日本語の読解においてもストラテジーが注目されるようになり、ストラテジー指導を取り入れた読解指導の試みもなされている。しかし、伊藤（1991）も指摘しているように、日本語教育の中でのストラテジー研究はまだ歴史も浅く、用語自体曖昧なまま用いられている。

読解における「ストラテジー」とは、ある学習目標達成のために学習者が能動的に選択し、用いる具体的な方策・方略を指し、学習者の受け身的な能力を捉えた「スキル」とは区別される（Carrell, 1991）。具体的なストラテジーとしては、スキミング、スキャニング、読み返し、知らない単語の読み飛ばし、文脈からの意味の推測、予測、背景的知識の利用、テキスト構造の把握、アンダーライン、アウトライン、ノートテーキング、要約、イメージ化などが挙げられる。読み手は読解課題やテキストの条件、読み手の知識などに応じてこれらのストラテジーを柔軟に選択していくと考えられる。

Levin（1982 in Fischer and Mandl, 1984）は、学習（読解）は課題との関連で生起するとして、学習（読解）ストラテジーを、①理解を目的とした全体理解のためのストラテジー（スキミング）、②記憶保持を目的とした全体理解のためのストラテジー（概念の構造化等によるテキスト分析、要約、高次の質問生成）、③理解を目的とした詳細部分理解のためのストラテジー（アナロジー、詳細部分の具象化）、④記憶保持を目的とした詳細部分理解のためのストラテジー（詳細部分の読み返し、詳細事実に関する質問生成）に分類している。この分類は、全体を理解するのか、詳細を理解するのか、また、単に理解するのか、それとも記憶するのかといった学習課題の性質によりストラテジーを捉えた点で画期的ではあるが、実際の読解学習ではいろいろなストラテジーが複雑に組み合わされて用いられていると予想される。本研究では、読解課題の違いによってどのようなストラテジーが用いられているのかを明らかにしていこうと思う。

また、先行研究から優れた読み手ほど目的や学習課題に応じて、ストラテジーを柔軟に選択し使用しており、優れた読み手とそうではない読み手が用

いるストラテジーに違いがあることも明らかにされている（Alvermann and Ratekin, 1982; O'Mally et al., 1985; Wade et al., 1990）。学習課題に合ったストラテジーを用いることで読解が促進されることもわかってきており、様々な課題に対応した形で読解ストラテジーの指導をしていくことが重要であると考えられる。そこで本研究では、ある学習課題において成績が上位の学習者と下位の学習者が使用するストラテジーを分析し、比較することにより、それぞれの学習課題において有効と思われる読解ストラテジーが何であるのかを明らかにしていく。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語の読解における学習課題と学習者が用いる読解ストラテジーとの関係を明らかにすることである。具体的には、調査により次の２点を検証する。

①学習課題の性質（選択肢問題・要約問題）によって、読解学習の際に用いられるストラテジーが異なる。
②読解課題における成績の上位者と下位者では、読解学習の際に用いるストラテジーが異なる。

3. 研究の方法

3-1 対象者

調査には東海大学の学部１年生と同大学留学生別科の学生45人の協力を得た。このうちどちらかの課題をやらなかった学生10人を分析の対象から外し最終的には学部生20人、別科生15人の計35人を採用した。学生の国籍は、中国13、台湾12、韓国7、フィリピン1、ビルマ1、マレーシア1であった。また学生の日本語学習歴は平均1.7年で、レベルは中級の後半から上級の前半に相当する。

3-2 調査期間：　1993年5月17日～5月31日

3-3 読解教材：　『経営について』（盛田昭夫他著）

『経営について』は、予備調査[1]を行なったICUサマープログラムの中級３で用いられたテキストである。タイトルは『経営について』であるが、内容はソニーでの経営方針について具体的な例を盛り込みながら一般向けにわかりやすく説明したもので、学習者の専門的知識を特別必要としないと思われたため採用した。調査では、本文を内容的に区切りのいいところで４つの部分に分け、そのうちの２つの部分を本文１、本文２として用いた。文章の長さはそれぞれ本文１が1302字、本文２が838字であった。本文１は学習課題１（選択肢問題）に使用し、本文２は学習課題２（要約問題）に使用した。また、学習者には本文の単語リスト（中国語・韓国語訳付）を渡し、読解学習をさせた。

3-4 学習課題

本研究で調査した学習課題は、選択肢問題と要約問題の２種類であった。読解指導の現場では、内容理解を確認する方法として質問応答、本文のまとめ（要約）などがよく行なわれているが、読むという作業とこれら質問応答やまとめといった課題との関係を考えると、質問に答えるために読む場合と要約のために読む場合とでは読み方が異なると考えられる。質問応答のための読みは、質問の答えになる情報を探す読みであり、要約のための読みは重要な部分に着目し、情報を再構成する読みであると予想される。ただし、今回の調査では本文の読解学習後に本文を見ずに選択肢問題を解くという手続きを取ったため、読解学習の際には、質問を予想しながら本文の詳細な事実にも注目し記憶するといった読み方になると予測される。紙の上で行なう選択肢問題や要約問題は、実際の教室活動での質問応答、まとめ作業とは厳密には違うだろうが、課題の持つ性質としてはかなり共通点があると考えられることから、本研究では学習課題としてこの２つを研究対象とした。

課題の性質から考えると、どちらの課題の場合も、学習者は本文の読解学習後に本文を見ずに課題を行なうよう指示されたため、本文の理解だけではなく記憶をも要求する課題であった。しかし、選択肢問題が詳細部分の記憶をも必要とするのに対し、要約問題は重要な中心的概念の記憶を必要とする課題であると言える。また、選択肢問題は再認課題であるが、要約問題は再生課題、しかも、読んだ内容の再構成を必要とする課題である。

本調査で用意した選択肢問題は四肢選択で、本文の内容に関する事実問題(factualquestion)のみ20題から成る（1問1点、20点満点）。要約問題は、本文の要約を200字程度で書くもので、採点は、工藤（1992a）が実験で用いた採点基準（主題文…3点、補足情報…3点、関連付け…2点、無関係な情報がない…1点、繰り返しがない…1点）に従い、10点満点で採点された。

なお、学習者に学習課題を意識させるため、読解学習に先立ち、読解後にどのような学習課題が与えられるか説明した。

3-5 ストラテジー調査用紙

今回のストラテジー調査には調査用紙を用いた。読解ストラテジーの調査を行なう場合、プロトコールを用いるのが普通であるが、調査期間や実行上の都合などから紙による調査方法を選択した。調査用紙は、予め列挙したストラテジーの中から読解学習の際にどのストラテジーを用いたかを選択させるもので、回答は複数回答方式で行なった。列挙したストラテジーは全部で23あり、これらは主として Wade, Trathen, & Schraw(1990) が大学生を対象に行なったストラテジー調査の際に分類したストラテジーを参考にした。23のストラテジーは次の通りである。

*a. スキミング
*b. 読み返し
c. 新出単語のチェック
d. 知らない単語の飛ばし読み
*e. キーワードを探す
*f. 主要な情報を探す
g. 詳細部分を読む
*h. アンダーラインを引く
*i. ノートテーキング
*j. アウトライン／概念の構造化
k. 段落単位でパラフレーズ
l. 文単位でパラフレーズ
m. アナロジーの使用
n. 具体的な例を考える
*o. 内容的背景知識の利用
p. 内容をまとめる
*q. イメージ化
r. 推測
*s. 主要部分についての自己質問
*t. 詳細部分についての自己質問
*u. 重要な語や文の暗記
v. 自分の経験と結びつける
w. 母国語に訳す

*: Wade他で挙げられていたストラテジー

さらに、学習者自身の自己評価を調べるため、本文を何パーセント理解し

たと思うか、学習課題で何パーセント出来たと思うかも聞いた。

なお、調査用紙は日本語で作成し、調査の実施にあたり、それぞれのストラテジーについては学習者に予め説明をした。

3-6 調査の手続き

調査は次のような手続きで行なった。

①学習課題１に関する調査（40分）

学習課題についての教示
↓
本文１の読解学習（15分）
↓
選択肢問題（20分）
↓
ストラテジーに関する調査（5分）

②学習課題２に関する調査（40分）

学習課題についての教示
↓
本文２の読解学習（15分）
↓
本文の要約（20分）
↓
ストラテジーに関する調査（5分）

本文の読解学習の際には、本文にアンダーラインを引いたり、書き込みをしてもよいという指示を与え、さらにノートを取れるよう白紙を１枚ずつ渡した。本文およびノート用の白紙には名前を書かせ分析の際の参考にした。

4 結果と考察

4-1 各学習課題における結果

学習課題1（選択肢問題：20点満点）と学習課題2（要約問題：10点満点）における得点の平均値、標準偏差は表１の通りである。

表１　各学習課題における得点の平均値と標準偏差

	N	平均値	標準偏差
選択肢問題	35	13.74	3.39
要約問題	35	6.31	1.98

なお、選択肢問題と要約問題の得点間には中程度の相関が認められた（r=.57）。

4-2 各学習課題において使用されたストラテジー

それぞれの学習課題において使用されたストラテジーについて、各ストラテジーとそのストラテジーを用いた学習者の人数を表２に示す。

表２　各学習課題において使用されたストラテジー（単位：人）

読解ストラテジー	選択肢 (n=35)	要約 (n=35)
a. スキミング	21	25
b. 読み返し	15	15
c. 新出単語のチェック	13	7
d. 知らない単語の飛ばし読み	27	21
e. キーワードを探す	21	18
f. 主要な情報を探す	19	19
g. 詳細部分を読む	9	11
h. アンダーラインを引く[2]	18	15
i. ノートテーキング[3]	9	14
j. アウトライン／概念の構造化[4]	7	12
k. 段落単位でパラフレーズ	5	8
l. 文単位でパラフレーズ	4	4
m. アナロジーの使用	1	0
n. 具体的な例を考える	6	8
o. 内容的背景知識の利用	6	6
p. 内容をまとめる	17	11
q. イメージ化	16	14
r. 推測	4	2
s. 主要部分についての自己質問	10	10
t. 詳細部分についての自己質問	1	2
u. 重要な語や文の暗記	24	15*
v. 自分の経験と結びつける	6	4
w. 母国語に訳す	8	2
x. その他	0	1
使用されたストラテジー数の平均	7.62	6.97

*$p<.05$（χ^2検定による）

この集計結果に基づきχ^2検定を行なった結果、「重要な語や文の暗記」においてのみ人数の偏りは有意であった（$\chi^2(1)=4.69$, $p<.05$）。従って、選択肢問題の方が要約問題より重要な語や文の暗記を必要とすると言える。

また、読解学習ではいずれの課題に対しても学習者全員が複数のストラテジーを用いていたが、使用されたストラテジー数の平均は、選択肢問題において7.62、要約問題で6.97であった。学習者全体でみた場合、選択肢問題の方が要約問題よりも多くのストラテジーが使用されたという結果が出た。

表4　各学習課題における上位群と下位群のストラテジー使用の状況

読解ストラテジー	選択肢		要約	
	上位 n=14	下位 n=11	上位 n=14	下位 n=11
a. スキミング	9	7	13	6†
b. 読み返し	4	5	8	3
c. 新出単語のチェック	4	5	1	3
d. 知らない単語の飛ばし読み	10	9	9	6
e. キーワードを探す	10	4†	8	2
f. 主要な情報を探す	5	6	10	3†
g. 詳細部分を読む	5	3	5	2
h. アンダーラインを引く	7	5	6	2
i. ノートテーキング	3	2	6	2
j. アウトライン／概念の構造化	1	2	7	2
k. 段落単位でパラフレーズ	0	2	4	3
l. 文単位でパラフレーズ	1	2	0	2
m. アナログ・ジーの使用	1	0	0	0
n. 具体的な例を考える	2	3	2	2
o. 内容的背景知識の利用	3	1	3	1
p. 内容をまとめる	8	4	4	2
q. イメージ化	6	4	7	2
r. 推測	1	1	0	1
s. 主要部分についての自己質問	4	4	4	3
t. 詳細部分についての自己質問	0	0	1	0
u. 重要な語や文の暗記	10	8	8	4
v. 自分の経験と結びつける	3	0	2	2
w. 母国語に訳す	1	5†	0	2
x. その他	0	0	1	0

†p<.10（フィッシャーの検定による）

5. 結論

本研究では、選択肢問題と要約問題という２つの学習課題を取り上げ、学習課題と読解学習の際に用いられる読解ストラテジーとの関係を考察し、さらに成績上位者と下位者とのストラテジーの比較からそれぞれの学習課題にとって有効と思われるストラテジーを明らかにしようと試みた。

まず、学習者全体で学習課題によるストラテジー使用の状況を比較した結果、選択肢問題において「重要な語や文の暗記」が多く用いられていることがわかった。選択肢問題のような再認課題の場合、学習者は記憶検索の手掛かりとして重要な語や文を記憶しようとしていることがうかがえる。

次に、成績の上位群と下位群のそれぞれの群について学習課題とストラテジーとの関係を検証した。その結果、上位群は要約問題に「アウトライン」と「段落単位のパラフレーズ」を多く使用しており、学習課題の違いによる

4-3 成績上位者と下位者のストラテジー使用の比較

成績上位者と下位者のストラテジー使用を比較するために、選択肢問題、要約問題の両課題において成績上位だった者と下位だった者を選択した。その結果、成績上位群は14名（選択肢: $\bar{x}$=16.71, SD=1.44; 要約: $\bar{x}$=7.9, SD=0.90）、成績下位群は11名（選択肢: $\bar{x}$=10.64, SD=2.01; 要約: $\bar{x}$=4.4, SD=1.70）となった。以後の分析はこれら25名のデータに基づき行なう。

まず、学習課題に応じてストラテジーを使い分けているかどうかをみるために、上位群、下位群毎に各学習課題で使用したストラテジーを比較した。その結果をまとめたものが表３である。

表３　上位群、下位群それぞれにおけるストラテジー使用の状況

読解ストラテジー	上位群 (n=14)		下位群 (n=11)	
	選択	要約	選択	要約
a. スキミング	9	13	7	6
b. 読み返し	4	8	5	3
c. 新出単語のチェック	4	1	5	3
d. 知らない単語の飛ばし読み	10	9	9	6
e. キーワードを探す	10	8	4	2
f. 主要な情報を探す	5	10	6	3
g. 詳細部分を読む	5	5	3	2
h. アンダーラインを引く	7	6	5	2
i. ノーテーキング	3	6	2	2
j. アウトライン／概念の構造化	1	7*	2	2
k. 段落単位でパラフレーズ	0	4†	2	3
l. 文単位でパラフレーズ	1	0	2	2
m. アナロジーの使用	1	0	0	0
n. 具体的な例を考える	2	2	3	2
o. 内容的背景知識の利用	3	3	1	1
p. 内容をまとめる	8	4	4	2
q. イメージ化	6	7	4	2
r. 推測	1	0	1	1
s. 主要部分についての自己質問	4	4	4	3
t. 詳細部分についての自己質問	0	1	0	0
u. 重要な語や文の暗記	10	8	8	4
v. 自分の経験と結びつける	3	2	0	2
w. 母国語に訳す	1	0	5	2
x. その他	0	1	0	0
使用されたストラテジー数の平均	7.0	7.79	7.45	5.0

†p<.10 *p<.05（フィッシャーの検定による）

この集計結果に基づき直接確率計算（フィッシャーの検定）を行なった結果、上位群の「アウトライン」において有意な偏りが認められ（p=.03）たほか、同じく上位群の「段落単位でパラフレーズ」にも有意傾向が認められた（p=.09）。この２つは要約問題において多かったことから、アウトラインと段落単位でのパラフレーズは要約問題において効果的なストラテジーであると予想される。一方、下位群では学習課題の違いによるストラテジー使用の差が認められなかった。これらの結果から、成績上位の学習者は学習課題の違いに応じて用いるストラテジーを変えており、ストラテジー使用において下位の学習者よりも柔軟性があると言える。

また、使用されたストラテジー数の平均を比較してみると、上位群では選択肢問題よりも要約問題の方が多くのストラテジーを使用しているのに対して、下位群では選択肢問題の方が要約問題よりも用いられたストラテジーが多かった。Alvermannら（1982）の調査でも、選択肢問題よりも論述問題の方が用いられるストラテジーの数が多いという結果が得られているが、これは、選択肢問題よりも再生を要求される要約問題の方がより能動的な学習が行なわれるためではないかと思われる。このことからも、成績上位の者は学習課題に応じてストラテジーを柔軟に使用していると考えられる。

次に、各学習課題に対する効果的なストラテジーを明らかにするため、ストラテジー使用の状況をそれぞれの課題について上位群、下位群で比較した（表４参照）。

集計結果を基にフィッシャーの検定を行なった結果、選択肢問題では「キーワードを探す」（p=.08）と「母国語に訳す」（p=.08）の２つのストラテジーにおいて人数の偏りに有意傾向が見られた。「キーワード探し」は上位群の方が多く用いていることから、選択肢問題においてはキーワードに着目するのが効果的なストラテジーであると予想される。一方、下位群で多く母国語に訳していることから、選択肢問題では母国語に訳すのはあまり効率的なストラテジーではないと考えられる。

要約問題では、「スキミング」(p=.08）と「主要な情報を探す」(p=.07）の２つにおいて人数の偏りに有意傾向があった。これら２つのストラテジーは上位群で多く用いられていたことから、要約問題についてはスキミングと主要な情報を探すのが効果的なストラテジーであると予測できる。

ストラテジー使用の差が見られた。一方、下位群ではストラテジー使用に有意な差が見られなかった。このことから上位者は学習課題に応じて柔軟にストラテジーを選択し使用しているのに対し、下位者は学習課題に応じてストラテジーを使い分けていないと考えられる。

また、各学習課題について上位群と下位群のストラテジー使用の状況を比較したところ、選択肢問題では上位群が「キーワード探し」を多く用いていたのに対し、「母国語に訳す」が下位群で多く用いられていた。一方、要約問題については、上位群が「スキミング」「主要な情報を探す」を下位群よりも多く用いていた。

以上の結果から、選択肢問題には「重要な語や文の暗記」「キーワード探し」が有効で、要約問題には「アウトライン」「段落単位のパラフレーズ」「スキミング」「主要な情報探し」が有効なストラテジーではないかと予測される。予備調査でも選択肢問題では「キーワード探し」が、そして要約問題では「アウトライン」が上位群でのみ使用されており今回の結果と一致が見られた。これらのストラテジーを指導していくことの必要性や有効性、また効果的な指導法の解明はこれからの課題であるが、先行研究からストラテジー指導は下位の学習者の読解を促進すると予想できる。読解において、例えば語句の意味・文法といった言語的知識や内容についての背景的知識はあるのに大意が取れないような学習者は、読み方そのものに問題がある可能性があり、そうした学習者にストラテジー指導を施していくことは意義があると言えよう。本研究の結果を読解に問題のある学習者に対する診断と指導にどのように応用していくかが今後の課題である。

注

(1)本調査に先立ち予備調査を行なった。予備調査には1992年7月にICUサマープログラムの中級３の学生12人の協力を得た。その際のデータ、分析結果は『ICU夏期日本語教育論集』第9号（pp.136-144）参照のこと。

(2)アンダーライン、ノートテーキング、アウトラインに関しては学習者から回収した本文やノートも参考にして数を割り出した。アンダーラインを引く箇所は「重要な文」「キーワード」「わからないところ」など様々で、これらを組合せて使用しているケースが多かった。

(3)学習者のノートを見ると、両課題を通じて新しい単語を覚えるために単語を書き出したようなもの、あるいは本文の完全な写しなどが目立った。本文をそのまま写して勉強する方法は、主として欧米系の学習者を対象に行なった予備調査では全く見られなかった。アジア系の学習者の特徴であるかもしれない。

(4)アウトラインとしては、キーワードやキーセンテンスが構造をもって書かれたもの、あるいは概念図のようなものを採用した。従って、学習者自身はアウトラインだとしていても実際書いたものが本文の写しであった場合などはノートテーキングとして処理した。

【参考文献】

伊藤博子（1991）「読解能力の養成：学習ストラテジーを利用した指導例」『世界の日本語教育』第1号 pp.145-160.

工藤嘉名子（1992a）「日本語の読解における要約訓練の効果に関する実証的研究」（国際基督教大学大学院教育学研究科提出修士論文）

工藤嘉名子（1992b）「日本語の読解における学習課題とストラテジーの関係」『ICU夏期日本語教育論集』第9号 pp.136-144.

Alvermann, D.E. and Ratekin, N.H. (1982) "Metacognitive knowledge about reading proficiency: Its relation to study strategies and task demands." Journal of Reading Behavior, Vol.14, pp.231-241.

Carrell, P.L. (1991) "Strategic reading." (Paper presented at the Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics 1991)

O'Malley, J., Chamot, A., Stewer-Manzanares, G., Russo, R., and Kupper, L. (1985) "Learning strategy applications with students of English as a second language." TESOL Quarterly, Vol.19, pp.557-584.

Wade, S.E., Trathen, W., and Schraw, G. (1990) "An analysis of spontaneous study strategies." Reading Research Quarterly, Vol.25, pp.147-166.